



日本絵類考

三

10
75
11



日本佳類考卷三

目錄

螺鈿

沈金彫

墨摺

紅

黃汁

東錦

藍

浮

象眼

大津

丹

綠青

錦

墨世

押

雲母



了因て喜海長と信りしは是れを後人の苦物
と稱して喜貝細工或は青貝摺りし本邦小於
て喜貝と最裝ふこと此は好まらざる

象眼画

象眼画ハ鉄板わしひ刀の髣髴等々金銀の厚片
と磁舟とを花舟山水等を描出とめたり或
り加賀の工人巧小象眼と作ふこと加賀象
眼と云ふ又真鍮とてせり或はこととを金銅象
眼と云ふ又鉄板小布目と磁舟山水と象眼
と云ふはことと市内象眼と云ふ漆器小象眼
塗あり象眼の製は鐵舟磁舟とて工藝志料小
象眼塗ハ金銀漆とて馬鉄磁器と漆物と最
こり小五漆と稱し而して後こととを磨出とて

して塗物の小刀もごまごまつゝひすたをけ
何れも物をかゝんとあふ甘ハ歳の牙と小刀
小代へて用ひし如竹柄の何れもあふ
とあふまゝに彫りしやそ即氣又ハ竹柄の音
物うては好この物と彫る如あ端ととの彫る
る上小塗をよ〜換ひして金箔或ハ金粉を入
且今後角粉うけ研〜一箇の粉と出さんと木
と〜好ハ是を漆うてつやと出さ〜一金の沈火
や〜と金箔と何〜して持て〜とむをま〜と

大津伝

一代男 天和二年 巻三 小寺泊の傀儡の家はさ
まとい〜 係小原凡の押伝と〜とハ花う〜け
て吾所巻の人形根本押の江法大師儀の嫁入種
各因古傳つ多門左古傳門々連奴こま〜ふ大津
近分よ〜書〜の〜り〜ふ都なつ〜
思ふ云と五ヶ儀津の草紙 割板の年月詳々 天和貞享の
頃也。巻三 四小龍虎梅竹古あふりきたり。松原
凡遊多儀の奴々藤の舎と君ふ〜と〜いとあき
丹小てあきたり。而と〜云こ在海長も同経國

のよい画と云ふは、大谷云く賢女心化粧巻之三
小池の州の計回屋花うけけくおやうと云ふか
くんと隣り合を云く浮世絵類考小文祿四年芭
蕉翁粟津の匿名庵よあま〜村四月四日小大津
画の筆のそ〜と云く何佛芭蕉能借日本國
六年卯
生 所句 進分の任佛小後也と云く
工山林
曰 大津佐小田向〜行〜録た〜も 一睡 近也
奇蹟考大津佐相模の賢小大津佐よ負ふ人老の
たうと云 美一様 一話一云小大津画替考の賢小
春は花のたのあや〜日く〜也 未中 紅粉画賣

昔風俗ニ文政十小大津画小丹のそりたり。暑さ
不考た 江州御友會雜話小大津佐ハ進分任とい
い又大谷佐〜と云く皆考所の町は名小古ふ
〜〜〜鳥の子紙と云く粗末の彩画と云
〜印刷〜考其画國ハ構画或ハ紙画〜
奴の鏡持婢女藤花と云く國少年の鬘と云く
〜一太音者の横鼻禪と云く又眉衣と着証と
た〜善の画と云く故小こ〜と云く浮世佐〜とい
〜〜 又平と云く〜の画と云く始〜と云く
〜又と云くハ〜云く繪画叢誌ニ大津

按ふ大津佐ハ浮世佐の一種ナリて其の始詳々
ナリシ蓋シ寛永ニ於テアリシものナリト在
多村信節の記ハ大津佐ハ若佐又と傳フ画き娘
佐トモトテモトナリ孫トナリテ又平太夫ト
ト薩款トナリ画キアリタリトナリトナリ
其画ハ信美山玉花院ハ明水ト地花井の画ト佐
表具ナリト十戒圖ト画キタリハ海北忠左衛門
藤原其トナリ画キタリ今の大津佐ハ信水
堂の額ハ頼政惟鳥と稱ナリト國ハこの海北忠左

衛門ハ筆ナリ寛永十三年乙亥六月五日と識
ナリト画者ノ名ハ赤トシ奴ノ著板ト名ナリ
テ画ト大抵トテ画キタリトナリトナリト上の方
ハ高村の小絵ト画キタリハ画キ寛慶ノ筆
ナリト画キ寛永ノ人海北忠左衛門ハ画キ
画キタリトナリ奉りタリハ又兵衛ト名ナリト
画キタリトナリ蓋シ古トナリト画キナリト
画キナリトナリ又と傳フ画キナリトナリト
この額掛返魂香ト土佐の末代浮世又平太夫ト
トナリト画キタリトナリト画キタリト世人事矣

なりと〜 侍くあやまじき。な〜ん又こまとよき
た〜もと〜て又平久吉な〜ふのそ出てたる
らあ〜な〜ん又この大津車ハ〜と佛車とさ
ら〜ら〜ハ芭蕉々大津車ハ〜と先ハ釘佛又
東海道分回信あふ大津大石辺佛車つら〜と
所〜ふ〜とあ〜ら〜な〜さ〜と天和のころと
既小種この圖と書きしものと又〜一狀男小
宗の嫁入運倉あふ御門多門在右御門々連奴こ
ま〜か大津邊あ〜てあ〜ら〜と〜ら〜ら〜知
ら〜信節の詠ふ〜は車〜と〜佛車と宗

と〜其外ハ傍よかし〜物な〜佛車ハ田舎
人の求るたあふ書初〜を後ハ買つ〜ものも
あ〜さ〜はたのづ〜あ〜ら〜た〜ふ〜と
と蓋〜出〜ん

墨摺画

墨摺画ハ墨摺一遍ノリテ彩色と描きし源也
信ト以テ宣政貞享年間ノ浮也信ト以テ所見余
書居代以賢の四花ノリテ墨ニ入核ハ寸紙の依
ハ美人持人形と作し其ノ墨摺画と名と一
ニト何ヲ大摺トシハ其ノリテ孫河守也ハ此優
画と墨摺一遍ノリテ彩色と描きし源也
者ハ芳瀧ノリテ其ノ墨摺画ト名ト一
トテ印板の画と彩色と一トシハ師宣と名ト一
印板の一枚摺画ハ古也ト一トシハ其ノ彩色

の明きく書行のしるし

紅繪

紅絵ハ一ニ漆絵ともいふこと膠をひきたる其
の乾漆の如く乾らばハツカシクも
也事談小^{九字保板}小^十淡州在門口棚町村某と
者板行の浮世位役者位と紅彩をよして享保の
始とてことと書し初筆のそとをひとて来
師大板諸國よとてこと又江戸一ツの産と不
了江戸位と
昔董集小紅絵といふハ享保の初創志せしもの
たや墨と膠と引きて書出と出たる故に漆画

とていつて奥村政信考少と云々と云々云々
浮世重類考別本ニ山東系傳云々享保の初日册
町和泉屋権四と云々者紅彩をの絵と云々初
ことと紅絵と云々まゝと色く工丈して墨の上
小膠と塗て金泥をく用めて漆画と云々大
小行も云々
おとひて竹紙享保ニ小昔ハ漆絵とて幅唐紙
小教席妓殺者の様と云々体と画きて黄土紅
うら丹なりと云々以て香く漆のくく膠と引て
藍と出と云々もや宝曆の以ハ紅摺の魚の見

まぢりふりり云々浮世絵師北尾重政と云々
り其此の丸と云々軍にてめきたる云々
長行子后編享保五ふじり一愚々女年の以て
市川五十郎大谷廣次、後漆塗ふひくせ大津
画をきつて甚田舎り一物なり一云々
按小紅絵ハ紅く一黄汁丹等して二三遍彩を
たゞと云々漆画ハこの紅絵の彩をのふ小膠と
引たゞと云々山東系傳の説の如く紅絵と云
まして後小膠とぬきたるのな一んおとひて
竹紙一宝曆の以ハ紅摺の絵と云々つひ漆画と

又紅糸ハ石川秀範平信國島根清原景芳丹
島高奥村文角政信正幸筆トカウト落款
テ印付キトシテの方一紅糸トシテ市中と賣
アトキタルものあり昔董集ト其國と稱ス

緑青絛

緑青絛ハ緑青の彩色一遍栴の浮世画とツキ
曆ハ江軒ヨリタルものト今世亦存ス
稀ナル余音館本春信ト画キテ武者絛形ト云
トシテ何カ如ク画フテ粗末ナルものあり

錦佐

元文四年板花佐錦佐合冊二の末小元文四年末二
月吉日衣裳佐師作者花佐坂井初末書林坂川
通佐小路下ル町幾佐在り傍道日奈行信重手名
草全部二冊作者坂井軒錦佐合小と云ふ所も
品々出まらるる

按ニ錦画ハ諸の錦の断片ときりぎりてきりつけ
画と製と一之のと云ふもと兼師マてこもと製
そ其の根幹なりこれカ竹也元禄以前とてあ
るしそのなまら西川祐信カて下画とて

錦画と製し、本ありて東系なりと云ふと押画と
以てハ誤なりと羽古板佐の條に詳しき事

東錦佐

東錦佐ハ其の形を以て美蘇なりと云へば恰如の西系
に錦佐の如くなりといひ東系と冠を以て錦
佐と云ふハ非なり西系の錦佐とまがらひけ
るハ其の形を以て美蘇なりといひ出處不明錦佐
ハ其の形を以て美蘇なりといひ出處不明錦佐
こと以てハ錦佐の最初なる吾妻錦佐也とい
和のこゝに吾妻錦画といふ所の出来を以て
おもひて益蘇画と云ふ事野宮暦明和の以て今
切佐と云ふ事四ツ切の三遍指の佐ありて後小

奉書指しつゝて奉書二ツ切と大紙とつゝ今ハ
大奉書中奉書ハ用ひる伊藤とつゝ紙と用
ひる合錦と最上紙と用ひる伊藤奉書一寸切と
合錦とつゝ大錦二ツ切と小合錦とつゝ大錦二
ツ切中錦合錦二ツ切ハ中合とつゝ伊藤奉書ハ
堅四ツ切とつゝ曲亭馬琴とつゝ錦佐ハ
昭和二年の江奈山の彩巻とつゝ板本師全六
とつゝ者板指某とつゝ板本とつゝ
とつゝ紙工とつゝ好々四五遍ハ彩巻指と製と出
とつゝ和とつゝ所とつゝ指出とつゝ

と全六自とつゝ武江年表安永年間の際
江ノ彩巻指鈴木春信の以とつゝ次分とつゝ
とつゝ鳥居清長とつゝ工とつゝ殊とつゝ美濃とつゝ云と
おとつゝて仲紙とつゝ今や浮世絵とつゝ全品とつゝ
さつゝ芝居役者の似真生写とつゝ更とつゝぬとつゝお
り春信春章とつゝ数風流とつゝ指指のつゝとつゝ高
世の姿とつゝ舞女とつゝ四季和具の人物とつゝ撫とつゝ
ぬとつゝ雛の浮世絵とつゝ者とつゝ所とつゝ其
の門とつゝ速とつゝ宗和北島とつゝたつゝ其の敷とつゝ
とつゝ暇とつゝつとつゝ高世の流とつゝ

墨茶画

墨茶画ハ薄墨ト書クテ形もとゞ浮世伝といふ
浮世画類考一巻歌川半國の條ト墨ト書ク
トテ錦伝といひ、此むとあり一冊書真こと
行りしり、僅小教板小一ツ止む、此小存
去勅一書買村幸二三枚を花とて

藍絛

藍絛ハ藍一箇指の浮世絛とシテ天保年間幕府
浮世魚の愈華美ナ流々として凡俗と害する
之のと爲し幕府に於て禁じしに於て
浮世絛師等皆筆を振り唾を吐きしに在りしに
之を以て後絛とこの藍絛一箇の浮世魚と又
一奈美と云ふ事ありて昔師長高野川舟國口國貞
口國芳口廣重等々として皆止むるに於て藍
絛と云ふ事あり

按小天保十三年の浮世絛新を禁止の觸書ハ其

小治世重師の一大厄起りし、後右平年表、小天
保十三年六月四日、所觸錦位、唱へ、歌、舞、伎、役、者、
遊女、女、藝、者、等、と、一、枚、指、下、指、上、儀、風、俗、小、拍、子、
節、付、以、来、開、板、ハ、勿、論、是、道、仕、入、由、由、
了、賣、買、物、子、由、其、外、之、是、合、卷、と、唱、入、
類、位、柄、等、格、別、入、但、重、。較、者、之、似、取、
等、書、儀、其、上、表、紙、上、包、等、ハ、新、色、
ハ、教、と、職、字、儀、ハ、賣、出、
仕、入、至、分、共、決、了、賣、買、物、子、由、
狂、言、之、振、向、相、止、欠、忠、孝、貞、節、等、
見、立、小、致、一、見

女、勅、善、ハ、為、小、相、成、ハ、振、書、
器、法、一、毎、用、之、半、數、不、相、
包、等、ハ、新、色、相、用、
ハ、節、ハ、町、年、等、ハ、異、出、
ハ、了、上、の、後、更、且、好、色、
其、日、年、十、一、月、晦、所、觸、
傳、止、但、新、色、七、八、遍、
之、名、無、用、因、前、儀、口、
知、女、ハ、限、リ、可、申、
景、六、款、仙、七、賢、人、之、
類、ハ、三、枚、ハ、別、
二、鑑、之、或

ハ上中下天地人なり。三枚ヲ、進ニ摺
出シ可申分ハ無撰勿論好色之徒可為無用也

押画 張文画

一代男養三泊の傀儡の家はさかひ。條
小屏風の押画をいとい花々々々。去所考の人
形板本押の弘法大師荒の嫁入を。佐本倭比事
小大虫小虫の差異とい。條小小押画考考考
の位なり。云々本朝画師傳ニ狩野家の画法
といへ。條小押画古来。十二支の圖あり。又
十二月の花鳥又仙人の祖師と云。花鳥山水
評多し。おの。具求也。云々。云々。浮世
位類考。堀等。堀の條。小文張の画刻板あり。云々。又

新川彦重の傳ふ一家の画凡と云う草筆の墨画
と板行して張交画と云ふ
按に押画はたしつけるる画の意なり押字はか
の留をつけしは押と云ふは日一張交画は即
押画なりとも其張交といふは土佐狩野の画
詩教の經冊なりと云交と云ふは名つけたる之
をいふは押画と云ふは後の名称なりといふ其の証を
一竹里小のいふは扇風の押画は確し張交なりと
云ふことと押画といふは云ふは即ち一寛政文化
の以て世に師新川彦重勝川春亭提筆撰の徒子

山水花鳥人物等と云ふこと板刻して大小也
小行と云ふ即一代男といふは板木押字といつ
とも草筆の墨画なり板木張交画は内筆小あり
さしは興なきふと云ふは僻遠の地と名は此
筆蹟と詩の便耳といふは且内筆の價高きけ
といふこの板刻の画と構ひててててと云ふ者
おろし故ふこの画は都府の地より行つと云ふて
まゝに畫國小と云ふ結きたる

浮画

藝苑日涉ニ池北偶談曰西洋所製玻璃器多奇巧
 之々又重樓臺宮室張圓壁上擬十步外視之重門
 洞用層級才數之々虞初新誌黃莊十傳有遠視画
 即浮画也浮世繪類考奥村政信の條小俗小浮画
 として名所或ハ富士牧村の圖曾我十番切小遠景
 と奥画として少々圖にかき出さるる室曆ニハ此
 浮画ニ板行とて其頃大小流りて云々古画
 備考小野川是春一龍富と号し近來浮画と錦画
 小うき出さるる室曆此の浮画よりより其表如年

表延享年間流行物と云ふは、條小浮画遠景
の山水と云ふ事、又享和年間流行物と云
つたは、條小北壽浮画上手、北高又浮世法師二
代、餘本春信云々の條小は、以て遠景と云ふ、
一枚信と浮繪と、今以て稱せし、釋史脈說年
代、永小、松川、春、浮、画、上、名、あり
按、浮画ハ、初てウキエ又ウカシ工、漢名遠視
画とて西洋の畫法ヤ、其の物國小付り、
ハ、何且の時、油画ハ、元和の以
て、我、國、小、付、り、た、りと云ふ、
其の盛、小、行、り、且、ハ、元文、延享の、時、
其の、

遠景の道具又世物者板ハ、
と、用、わ、り、享和年間、司馬江漢更、小、西洋の畫法
に、行、り、其の、法、益、也、
畫の如き、皆この畫法と善く、北高、廣重の山水
亦皆この法、小、板、ハ、余、幸、四、條、見、の、画、と
燕、視、も、小、遠、を、落、影、の、所、
小、西洋画、小、似、
小、板、

雲母位

浮世位類考小字樂東洲高と号し俗稱高藤十と
_{と係中と係} 所州侯の能殺者なり歌家役役者の
似形と号す、あまて真と画くんとてあまて
さうと書きたと、う、長く世小行ひ且一兩年
あ、て止む五代目白猿幸甲の推小宗中甲の菊
と延仲花百十と廣法即中と鬼法の歌と幸甲と
重月四と云母と括す、そのま、信小雲母
位と、

按小字樂、雲母指此の二是、面白しと、其の

人の似息連ハあやうく小あ小過テ顔の敵類の不
くろまきへ細小画きて却てあぬまひとえ人
く笑脱せきくくくくくくくくくくくくくくくく
且たといふ事案小あつひ聖母位と画くもの多し
新唐莫山北高第之の徒も亦画きたる

柱のくく一画

梅遊笑頂小柱のくくくくくくくくくくくくくくくく
北待集ニ金小友来乞楹帖其家任右平寺傍門臨
大池余為書鳥石池邊樹僧敲月下門一聯適有尼
庵亦来乞桃符傳奴不知即以此自之一時見者傳
為天資賦以懺解トク七律一首あり五元集梅遊
小柱枝亭柱のくくくくくくくくくくくくくくくく
一雅延孫相集小のくくくくくくくくくくくくくくく
かきたる重の歌をくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

彩色摺紙

鳥座法明和紙板の紙は、小とく色摺のそと、小とくを考へ、
小古くても、あつ所の森相なり、白粉若の上包又と
位双代の袋なり、小とく、横板ありて、とくと藍
と、白くつて、彩色板あり、又、又、又、又、又、又、
小京保の末柏蓮の又、才牛の志忌追尋の集又の
恩小即才牛、句三句の重勝間龍水筆と、つら
小色摺小なり、其の後元文のそと、小、小、小、小、
の社中、とて、春興のそと、物出、と、小、小、小、小、
と、吉田、奥川、と、つて、青、黄、赤、の、三、遍、摺、と、な、り、及

了とのわして差よむす指法のみはまうてあし
澤さし所となせしものよりし

指物魚

浮世位類考小泉寺一の巻小寺一の本日の一使
書しし指物魚花鳥の志麻虫等と出さるるま
等麻の條小等麻は天目の以て行され指物魚奈
此の行燈又指物魚麻文法の魚刻板あを云と
按し指物魚はもして在歌俳句等小虫と加へ板
刻とししものよりし即春興の指物魚石仏等の指物
器層の指物等々此の條句在歌小虫と加へし
うらハ甚古し其の形を施したるハ形を指の
條よいし如く享保の比々様めなれと格あり

華夏ふなりたるハ文化文政の比なり〜〜提等
 琳泉守一曹飾北斎々々最々け魚々表々々漢魚
 家の谷文晁海也華山克琳派の沼井抱一能本其
 一土佐赤の浮田一甚大不其麗サ〜〜虫〜〜
 又を也世世世田是真々々最妙を得〜〜自一様の
 臣法ありて風振振〜〜さ〜〜と旨ととて格お
 の寸法ハ大小一なり〜〜れ〜〜紙ハ大極奉書と
 用ぬ〜〜なり

摺込彩色佐

武江年表ハ安永年間柄紙の〜〜任師と〜
 能溜師なり〜〜摺込の彩色と工丈〜職人の製
 して行い〜〜やうて廢〜〜
 浮世佐類考ハ宝曆明和の以職人等佐本の彩色
 と工丈〜〜大ふり〜〜と能溜師五文丈の点
 式多〜〜のハ虫々々
 按ハ摺込彩色ハ佐の表面〜〜顔料を〜〜
 たりと〜〜紙ハ工丈ハ蓋〜〜の端虫〜〜

この栴檀の類とて工まゝに染めたるものゝ
日月の光り削のそ衣服の栴檀の類に
い雲母のちと撒布しこゝを緊くして
ふたす即彩色栴檀の類に
なる

ゆきがらゝ佐

武江年表よ安永二年重工島山石燕号房島山彦
とびつゝ佐本二巻を著つてゆきがらゝの彩色
と工まゝに染むるの類とて由安間貞孫の
話せり浮世佐敷考別本島山石燕の條よゆき
がらゝの栴檀とゆひ其佐本と島山彦と云安永
三年板之彫工録文章東美栴檀工栴檀南幸と云
按よゆきがらゝに即這栴檀を栴檀の最冠と
まゝに一枚染りて其彩色栴檀の條既よらと云
拙著昔飾北斎傳よ北斎の巻中よ華よて仕長

得ハわく〜おと〜う〜く〜得共板行ハ
お成りハ、墨摺師のあつてハぬきわ〜ハ板
二百部位ハ〜も出来て〜得共後〜ハ〜
〜考〜不中ハ依之ぬきわ〜一流ハ〜相
定め只〜色合の弄〜上ハ云〜ぬ
きわ〜ハ全〜一のぬき〜て〜百枚
二百枚と一様ハは上〜ハ〜得〜も
の〜た〜北高〜筆〜わ〜
ろ〜い〜後ハ板〜の工又あ〜
又板ハ天明三年石燕、島山彦古小行ハ是なる

と〜聖四年重國百番徒然翁と列行〜余近
頃其の一本と得〜出板者ハ日本橋通〜丁目
出雲寺和泉様〜末ハ七十三番島石燕其房
画板合門人子興燕示石調彫工井上新七〜

両面法

両面法ハ紙の一面ハ美人の姿と墨き一面ハ其
のうゝは姿と墨き紙のうゝと名づく
長多川歌麿の創意よりて巧妙なりそのなりと
南村新のときをいふや僅小四五枚ありて止む
紙小世も存するに稀なり紙も稀なり書一紙と
花とす

互佐

釋史隱記年代記云互佐と云ふは富川秀祐と
了ぬ云々

按ニ互佐ハ其の寸法の極めて中なりと云
人物志云一富川島在ハ富川房信島在清信曰信
秀の徒なり云々一云云云云云云云云云云云
皆この互佐と云き一云云云云云云云云云云
たてまゝ思女の玩物なりと云一自一種の連法也
予奉書指し最善と云云云云云云云云云云云
の極小なりと云云云云云云云云云云云云云云

口伝

口伝ハ口伝双紙又ハ奈白集ナリトの首小画きたる
と云ふハ口ハイトクチコグチナリト云ふハ口
傳の系考小々の双紙の口画と雁優の似点ハ
て更に出とハ平酒して文化四年板山東京傳
作の於六根本曾傳付冊と云ふハ又考首小口伝
と加へたもハ口伝ハ好むハ由ハハ又奈白
集の口伝ハ天明二年板歳の且と類とハ口集の
考首小鳥山石燕ハ画きたる怪子の口画ナリ
さしハ奈白集の口伝ハ古くハ口伝双紙の口画

ハ 法 守 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

加 留 多 住

加 留 多 ハ 白 河 燕 雀 小 住 者 也 カ ル タ 一 以 一 春 湊
浪 語 小 加 留 多 ハ 輕 松 上 以 一 語 の 畧 也 一 説 小
加 留 多 也 吾 昔 紙 の 義 也 又 一 説 小 地 名 也 又
一 説 小 ハ 西 班 牙 の 語 也 上 詳 也 以 一 注 也 物 法
卷 一 小 河 の 以 一 是 也 南 東 也 一 カ ル タ 一 以 一
一 以 一 海 一 一 以 一 十 二 小 一 以 一 四 但 一 以 一 勝
負 一 決 也 云 一 職 人 却 類 小 河 蘭 語 人 一 以 一 説 小
寛 永 の 一 以 一 崎 陽 の 人 氏 倣 了 故 也 一 以 一 其 製 古
今 口 一 一 以 一 今 後 一 以 一 所 の 製 一 外 一 以 一 一 以 一 内 白

をく重く研吉毛と巴字とつひ赤色と伊須とい
い内形と旅留といひ半内と骨杖とつひ四品各
十二共小四十八枚なり其一ハ虫の形豆年と云
二ハと九ハむらさき其数自と重く十八僧形十
一ハ騎馬十二と武持なり又か字字年須年か
つしめり多へて南蛮國のこゝろ茶なり
按小加留多ハ西報牙の語なりて西洋より傳来
きしものなりて支那よりハ骨牌あり象
牙とててこゝろ他即加留多の類ハ我國傳来
し所の加留多ハ數種あり中ハ物さ字年須年加

留多ハ七十五枚なりて今行りしハ天正加留多
ハ四十八枚なりて中一枚の表ハ天正金入極上
仕入のハありて款加留多ハ蓋ハこゝろて出て
たゞものなり今世ハ行りしハ花加留多ハけ
類なり

漢土小籠子選格新選格なり。物ハ。う。に
て官位双六。う。の。あ。う。と。能。を
一。の。官。職。の。事。と。見。事。ハ。是。へ。さ。せ。ん。う。た。め。か。り
是。ハ。賈。の。六。面。ハ。祿。品。位。階。等。級。の。文。字。と。記。し。て
用。日。板。本。姉。子。と。名。を。寛。延。元。年。浪。花。の。人。山。本
由。古。通。能。と。い。ふ。の。因。と。能。を。重。ハ。因。山。の。書。た
る。所。凡。例。一。卷。と。附。刻。を。官。職。補。任。双。六。と。名。く
ハ。百。卷。の。因。十。年。條。を。以。て。著。述。し。て。門。子。見。事。の
儀。神。集。統。ハ。傳。つ。て。い。は。し。ぬ。元。文。年。中。と。云
ふ。其。姓。姓。ハ。能。を。出。し。て。小。能。を。改。ハ。淫。色。と。い

ふ。う。と。さ。し。し。も。こ。い。と。と。を。有。し。と。能。う。て
淨。土。双。六。と。名。け。し。一。冊。ハ。出。身。し。し。の。な。り。ん。女
く。か。き。た。し。と。あ。と。い。は。し。す。
按。ニ。双。六。ハ。博。奕。の。一。具。な。り。古。く。は。今。こ。し。の。所。を
持。統。能。ハ。双。六。と。禁。じ。し。し。一。こ。し。又。ハ。た。り。双。六
盤。と。て。賚。と。筒。ハ。入。と。盤。上。う。て。姉。子。と。勝。負。と。決
ま。り。し。る。能。双。六。ハ。即。双。六。と。い。は。し。て。出。て。た。し。と。い

羽子板伝

嬉遊笑覧小羽子板こきめ六下學集小文安元年
羽子板正月用之し出づり年中定例也此何年の
行事出づ正月十一日の條此五尾作舟の以老云
く此舟く〜沖くやけのこきめ〜こきめのこ白貝
と下云と畧きて田舎のそと板舟くよて小異あ
るといへ〜も殿さむめくさあ我更く〜ハ奥州
小春く〜作とよも日〜信濃と〜板ハ夫婦の舟
こりてゆて子供を〜ハ舟〜内裏と〜板〜いよ
ハ伝あ〜ふ〜一舟男よと〜板の意も夫婦子

りつとくもやと云く

号董集小羽子板の古制と載て云くこと要州三
春小いし〜〜〜付〜た〜古制なり〜〜制化
質素なり〜〜古雅なり〜〜表小い立付小格とい
りふも粗継小直〜〜本北小格とあり〜聖冊
保吉おまていふ〜〜其國法小載り

按小規今在ま〜〜行〜〜羽子板ハ役者似良
及い美人の姿〜〜と錦重小〜〜そのなりこ
目と括〜〜押重〜〜誤なり〜〜板ありて
格〜〜美人重〜〜貼〜〜つけ押重小〜〜

と重なり〜〜後〜〜錦重小〜〜括〜〜
押重〜〜いた〜〜人〜〜と〜〜押重と錦位〜〜ハも
と別なり〜〜錦重の條小〜〜如〜〜

紙鳶画

輪扇画 誘小 痛うめの ときい
古樹よ 邦人ハ い
園著 とい
 とい 園東人ハ たこ とい とい 形の 鳥 紙 魚 小 似
 た とい とい とい とい とい とい とい 西川 紙 信々
 とい とい 物 鳥 紙 魚 の 形 とい 園東 とい 幸 真 とい
 とい とい の とい とい 物 とい とい とい とい とい とい
 とい とい とい とい とい とい とい とい 和 名 紙 とい とい
 とい 風 鳶 紙 鳶 とい とい とい とい 文 とい とい とい とい とい
 とい の とい び だ とい とい とい とい とい とい とい とい とい とい
 とい とい とい とい とい とい とい とい とい とい とい とい

旅遊英賢小園来りてたことりし物類録峰二西
國ふたつ又好りて唐健りてたことりし長崎
ふてふりしりし上野及信州ふてたことりし奥
州ふてたことりしりし竹島に雅存ふり北に
云々
志保之理ふ三州吉田ふて吉州見海のあつたに
て五月五日家ふたなりし依家と他ふてあけ端平
の遊ふと大さ一丈四方費銀百四十文云々
長崎歳事記二月の条に風中の製一丈ふりふ
とん銅床等曾ふとん入道ふりとん奴ふと百

足ふ、蝶ふ、障ふ、日本ふ、ふこふ、うハ
かふ、ふ、ふ、ふ、桐に鳳凰海老尾天下を
平天一天上大夫等の文章と他ふとあふ云々
按に依家重ハ古ハ浮世重師の一業なりしは後
二ハ月一専門の業とせりて依家往うきと稱し
年中こととのふと重く者ありことと重く小法は
今来ふて行りし、依家重ハ其ハ蓋し提筆琳
々々の筆ふはかふ、そのふ、ふ、ふ、ふ、
ハ表者更日の出ふ指ふ、海ふと最ふ、昔時
初に核き依家大ハ行りし、即表者往ふと重きこ

とを切て抜き骨を抜けておけうなり著飾此
高頗る刻ぬ小粒一帯一高其の表に入て依きと
重くへーとつひ大なる籠なる靴たんなり華小
まろせて重き出さし骨を切抜き骨と抜骨一系
目とつけておける魚一と一其其の言は如く
一ておげたふ中心其所と浮て左方へ傾くこ
うなるまきと

くつゝ志

嬉遊笑覧小寛文延宝の以影人形とつひ一とめ
ハ今おまとうつて新う鳥き一太の首骨ふ
この形と字一又いささの依きと切てて骨形と
くつゝ又身小抜き物とつけて新わく一平
まろくおまといあま今の跡ふ依きとつて新も
くつゝくつゝあま平く知き頭とてえ一との子
まろく其はハその如く巧なりくつゝハなり石臺の
花の骨く所又ハ抜くもの白依きとふやうて文
字のあまハくくおまろくあま一〇化物ろくそ

くさくさハ今とウツルハ紙と種々の人形と切て
ニツと竹串と挿して裏とくといとの物語
うけ佐ハ今ハウツルハ紙と種々の人形と切て
巾着人形のもつて是れ
武江年表ニ享和年間の条ニ 教条とリハ人々
つゝ（五）とむ

繪畫叢話ニ薩佐の教ハ昔ハ馬き紙と切替り竹
串と四ツ小刻して去脚の如くおさし行燈（五）と
一玉簾の前の海と九尾の狐とウツルハ世酒呑童
子と鬼とウツルハの類とて有し享和年間

教条とウツルハ人エキマシ鏡とウツルハ目鏡とも
いゝ一教條ハ教条と書き相の板と嵌入と
先人物風系と自在とウツルハ工と
一写一佐とウツルハ大と行と
ては技とウツルハ製造と又精巧とて教条と
ウツルハ森永元年歳七十九日市橋御所内
とウツルハ佐とウツルハ
按ふとウツルハ佐ハ教條笑賢小香藤山人の路史と
引きて教條ハ漢の武帝とウツルハ
と古くともありとウツルハ教條とウツルハ佐とウツルハ

いゝゝ夫肝の如くおして行燈小字と教止の底
位に近きひきまて坊間にて書きたりあり知、知
対りの底位と既し行燈小字とんゝと油と、
一河舟小字とんゝとまなとありてこれと
被障小字きたりてとつて又きたりてまな
と娘きたりて近きことと現燈と号し教書小
字と種々の物と字にてお學生徒の照年とあり

疵瘡画

疵瘡画の如評などから輪扇画誘ふ克起之疵瘡
除の鐘馗の画きやゝハ世間にて辰砂にて画く
者あり是了間達にて紅とて画くゝと紅花
ハ本州十日く能悪邪熱張之疵瘡画ハ紅とて
画くありてこれハ今狩師ありて辰砂と目ハ鐘
馗と画くハ古法小ありさゝりて
按、疵瘡画ハ古ハ鐘馗の図ありて後也
よむてハ海世画師ありてその達摩本免
の類又ハ金をと大張子の類と画くて板あり上

と佐州御為より、重子捌きたる時迄の世となりて
て能てありし事

又梅小疵痕重ハ佐州御為より、重子捌きたる時迄の世となりて
行の好みの葉子袋等へも、達摩金をとりたるの重
と白指より、重子捌きたる時迄の世となりて、葉子高法島
居の輕燒の袋小、重子捌きたる時迄の世となりて、葉子高法島
馬喰町四丁目、淡島伊賀屋、若原秀英、精製とあり、
了達摩及金をその態より、重子捌きたる時迄の世となりて、葉子高法島
と重子捌きたる時迄の世となりて、葉子高法島
表小疵痕重ハ佐州御為より、重子捌きたる時迄の世となりて、葉子高法島

存七通疵痕より、諸病いと物決て、重子捌きたる時迄の世となりて、葉子高法島
自享和三年、重子捌きたる時迄の世となりて、葉子高法島
番札より、重子捌きたる時迄の世となりて、葉子高法島
は故は先と極より、重子捌きたる時迄の世となりて、葉子高法島
く、中より、重子捌きたる時迄の世となりて、葉子高法島
重子捌きたる時迄の世となりて、葉子高法島
折神、ハ輕くは仕上りて、遊は言系記ひのか
よ、中より、重子捌きたる時迄の世となりて、葉子高法島
は祝義は進物より、重子捌きたる時迄の世となりて、葉子高法島

中江松とてん一キと陰き君よの交文政七申
年とてん流りて来ハ用りてあるは重法と也
んん小運摩の徒装まきり私念願金町のお
稻荷さむれは利生ては得念具形の子極う
疵痕とてんわわ焼とてん評判とてん世
再板運摩の徒装入不相替は凡味と成下り振奉
幸以上沖中七月再板

地口行燈魚

依運集覧小初新小宝曆六年子の二月初午いふ
了行焼六月秘園舎の行焼もやまなとてんいふ
照書多持集明和額初年 大鼓音高畫子集行燈
地口年々新 今八年と古一其故ハ更うきとも
年とてんの因よまゝかき日一物とてんいふも書て
幸一板一ヶ所とてん日一物也
梅小地ハ行燈ハ狂歌のよちまの如く一句兩義
とてんいふ即ちとてんいふとてんいふとてんいふ
のとてんいふ地口の書ハちまハたゝ行焼と

い〜了 画本と著り〜たる

切組燈籠画

武江年表と寛政年間流り物とあり。條小切組
燈籠画初りもと上り〜とあり。寛政美か
わ〜画〜

古画備考小見本の紙小切組燈籠画ハ上り〜
下りの物なり。夫の〜紙ハ京の生洲大坂の天
満宗の國なり。と重板も。寛政享和のころ。寛政
政美画〜画き。又北高も。條小切組。文化小画
て新川國長冬久は。條小切組。と〜。数わ〜
画き出〜。其様とあり。年〜摺出とあり。

信世佐類考別本小切組燈籠紙は糸の生紗大
坂の天満島の園を以て再板して行のりて其意
高更小工夫して吉原俄の園葛西を庭中の園
芝居の燈籠紙を以て書き出さる

浮世佐類考小歌川園長佐類梅干し助一雲高
号を江戸の産なり芝居に十月小任一法小針指
金六町小任を仲双紙二種あり組上燈籠紙或ハ
こまうき細工物小組まふしは佐類く出さる
其工夫小妙と評するなりワラジ
梅小切組燈籠紙小旦の玩物なりて是を人物か

と信切を板まき新まきをすつけ燈と云ふこと
是と云ふは板納涼の一景物なり

廻る燈籠画

嬉遊笑覧小廻る燈籠の聲草小わくそはまると云
 可揚燈籠廻る燈籠の軒小ゆふ夕又燈籠集
 こゝに巧しき色とくくさるややくまらる
 灯籠のそとく紙日紙世と飾小姿く月のうけ法
 師のくさち急の廻る燈籠三朋をか寛永中の
 狂女に懐子そらをあひて又くやととく
 廻る燈籠身小くゆ中秋の月くそくうけ灯籠 後
 山井 ぶくくくのいそけの廻るくろく
 平灰と去あはきぬくやとく一灯籠文字と振ふは
 得くとく振ふは

平反とありし一の籠 於ありし、あまとも益なりけりハ
燭より王たるなり
録より廻り灯呂ハ 漢土ハ走馬燈と云ふも槐西
雜志ハ壁土の画ありてやうハ三田と云ふ中人
縁壁而行如燈籠之状廻り灯呂ハ似しと云ふ
按ハ廻り燈籠ハ古く寛永年中にありしもの
のやうして漢土よりしりて其の製ハうげ画の
人物敷圖と画きしものと切替て針くぬよつけ竹
竿棒ハ結ひつけ風ハ従ひ古くハまりハやうハ
なハことと灯呂の中ハおきあうして燈と云ふ
とい其叙つて一具となり、即ち今余ハ切替

返り廻り燈籠ハ角燈籠の形ハ兩國橋の景色
と画き中ハ切替の人物風ハ従ひて走馬て世の
橋と海とのさゆと云ふもの又ハ丸燈籠の
より其が雨の降るまゝと画き中の切替
の人物雨ハあひうけ出り行くのさゆと云ふ
ものなり今も夏時ハ此のこまと云
ふの所と古の如く行はせり



